

百日咳（2025年）

特徴的な咳こみ発作をおこす伝染性の病気です。百日咳菌の感染によりおこりますが、五種（三種・四種）混合予防注射で予防できます。そのため以前に比べると激減していましたが、最近、年長児や成人の発症が増えてきており、特に2025年は全国的に流行中です。また、予防注射をする前の乳児、特に3ヶ月前の乳児がかかると重症になり、死亡例もありますので注意が必要です。

★ 症状

潜伏期間は7～10日です。始めの約1～2週間はかぜと同様の症状ですが、次第に咳が強くなります。特に夜間に多い傾向があります。咳が「コンコンコン」と長く続く連続性の咳こみ発作（スタックアート）と、その後「ヒューッ」と息を吸い込む発作（フーピング）を繰り返すのが特徴です。最後に粘稠な痰を出して発作が止まります。この様な発作を「レプリーゼ」といいます。この間、顔面は赤くなりますが、呼吸が出来なくなると蒼白になることもあります。特に小さい乳児では呼吸が一時止まったり、チアノーゼ発作として現れることが多くみられます。熱はまずありません。このような症状が約4～6週間続いて回復していきます。

★ 診断

症状や検査所見にて診断します。典型的な症状であればそれだけで診断できます。特に夜間の咳を録音すると診断の助けになります。しかし年長児や成人では典型的な症状や検査所見が無い例が多く、最近では迅速診断キットで抗原の検査をしたり、鼻咽頭から遺伝子検査（結果は数日必要）をすることが多いです。

百日咳と同じ様な症状をおこす感染症として、サイトメガロウイルス、アデノウイルス、パラ百日咳菌等の感染があります。症状は一般的に軽いですが、鑑別診断には血液中の抗体等を検査する必要があります。

★ 合併症

肺炎や気管支炎、中耳炎などがあります。まれに脳炎、脳症を合併することがあります。

★ 治療

マクロライド系抗生物質が有効ですが、ひどくなってからではあまり効果がありません。また最近ではマクロライド耐性の菌も増えています。鎮咳剤や去痰剤、気管支拡張剤などを併用します。吸入や気道分泌物の吸引なども行うことがあります。無呼吸発作を頻発するような重症な乳児では、入院の上、慎重な呼吸管理が必要です。

★ 看護

家庭では室温・加湿に注意し、気道への刺激に気をつけることです。なるべく安静にし、食事や水分を十分にとることが大切です。

五種混合予防接種は生後2ヶ月から接種できますので、乳児にはなるべく早く接種するようにしましょう。2018年から5類全数把握対象疾患になったため、医師が保健所に届出する必要があります。園・学校には5日間抗生物質内服後は出席可能です。